絵本太功記（えほんたいこうき）

〔解　説〕

寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕

主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。

光秀の母さつきは、主君を討った光秀に立腹しており、家臣の四王天田島頭や光秀の妻操の願いも入れず、一人尼ヶ崎に転居してしまいます。光秀は母の心に感じ自刃しようとしますが、四王天と息子十次郎に諫められ、

改めて天下取りの戦へと向かいます。

尼ヶ崎のさつきの閑居へ、光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつした久吉が一夜の宿を乞うのでした。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。

〈尼ヶ崎の段〉 最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を真柴久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。敗戦の様子を告げに戻ってきた十次郎は深傷に息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

尼ヶ崎の段

月漏る片庇。

こゝに刈り取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現れ出でたる武智光秀。

「必定、久吉このうちに忍びゐるこそ究竟一。只一討ち」

と気は張り弓、心は弥猛藪垣の、見越しの竹をひっそぎ鑓。『小田の蛙の啼く音をば、止めて敵に悟られじ』と、差し足抜き足窺ひ寄り、聞こゆる物音、『心得たり』と、突っ込む手練の鑓先に、

「わっ」

と魂消る女の泣き声、『合点行かず』と引き出す手負ひ。真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒。

「ヤア、こは母人か。し為したり。残念至極」

とばかりにて、さすがの武智も仰天し、たゞ呆然たるばかりなり。声聞き付けて駈け出る操、初菊もろとも走り出で、

「ノウ母様か情ない。この有様は何事」

と縋り歎けば、目を見開き、

「嘆くまい嘆くまい。内大臣春長といふ主君を害せし武智が一類、かくなり果つるは理の当然。系図正しき我が家を、逆賊非道に名を穢す、不孝者とも悪人とも、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮かべる雲。主君を討って功名顔。天子将軍になったとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たば、物相飯の切米も、百万石に勝るぞや。おのれが心たゞ一つで、印は目前これを見よ。武士の命を絶つ、刃も多いにこのやうな、ひっそぎ竹の猪突き鑓。主を殺した天罰の報ひは親に

もこの通り」
と、鑓の穂先に手をかけて、抉り苦しむ気丈の手負ひ。
妻は涙にむせ返り、
「コレ見給へ光秀殿。戦の門出にくれぐれも、お諫め申したその時に、思ひ止まって給はらば、かうした歎きはあるまいに、知らぬ事とは云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞ。せめて母御の御最期に、善心に立ち返ると、たった一言聞かしてたべ。拝むわいの」
と手を合はし、諫めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き。操の鑑曇りなき、涙に誠表せり。光秀は声荒らげ、
「ヤア猪口才な諫言立て。無益の舌の根動かすな。遺恨を重ぬる小田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我が諫めを用ひずして、神社仏閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門の習ひ天下の為。討ち取ったるは我が器量。武王は殷の紂王を討つ。北條義時は帝を流し奉る。和漢ともに、無道の君を弑するは、民を休むる英傑の志。女童の知る事ならず。退りをらう」
と光秀が、一心変ぜぬ勇気の眼色、取り付く島もなかりけり。
折しも聞こゆる陣太鼓、耳を貫く金鼓の響き。『あはや』と見やる表口。数ヶ所の手疵に血は滝津瀬、刀を杖によろほびよろぼひ、立ち帰ったる武智が一子、庭先に大息つぎ、
「親人、親人これにおはするや」
と、云ふも苦しき断末魔。見るに驚く母親より、娘は傍に走り寄り、
「ノウ痛はしや十次郎様。婆様といひお前までこの有様は情けない。お心確かに持ってたべ。やいのやいの」
と取り付いて、介抱如才泣くばかり。光秀わざと声荒

らげ、
「ヤア不覚なり十次郎。仔細は何と、様子は如何に。具に語れ」
と呼ばはれば、
「はっ」
と心を取り直し、
「親人の指図に任せ手勢選って三千余騎、浜手の方に陣所を固め、『今や帰国』と相待つところに、敵はそれとも白浪の、艪を押し切って陸路（に漕ぎ付け、『おひおひ都に馳せ上る、真柴の軍勢ござんなれ』と、鬨をつくって味方の軍兵縦横無尽に薙ぎ立つれば、不意を打たれて敵は敗亡、うろたへ騒ぐを追っ立て、追ひ詰め、こゝを先途と戦ふうち、後ろの方より大音声、『真柴筑前守久吉の家臣、加藤正清これにあり。逆賊武智が小童ども、目に物見せてくれんず』と、云ふより早く太刀抜きかざし、四角八面に切り立てられ、瞬く間に味方の軍卒残らず討死仕り、無念ながらも只一騎、立ち帰って候」
と息つぎあへず物語れば、光秀怒りの髪逆立ち、
「ヤア云ひ甲斐なき味方の奴ばら。シテ、四方天但馬守は」
「さん候四方天は、目指すは久吉一人と、昨朝よりの一騎駈け。乱軍なれば生死の程も確かにそれと承らず。親人の御身の上心にかゝり候故、未練にも敵を切り抜け、これまで落ち延び帰りしぞや。このところに御座あっては危うし危うし。一時も早く本国へ引き取り給へ、サ早く早く」
と、深手を屈せず父親を、気遣ふ孫の孝行心、聞くに老母はせきかねて、
「アレ、あれを聞きゃ嫁女。その身の手疵は苦にもせ

ず、極悪人の仲めを、大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀、子は不憫にないか、可愛いとは思はぬかやい。おのれが心只一つで、いとし可愛の初孫を、忠と義心に健気なる、討死でもさすことか、逆賊無道に名を穢し、殺すは何の因果ぞ」

と、せぐり苦しき老ひの身の、声聞き付けて十次郎、

「ヤア、そんなら婆様には御生害遊ばしたか。今生のお暇乞ひ、ま一度お顔が見たけれど、もう目が見えぬ。父上、母様、初菊殿。名残り惜しや」

と手を取って、妹背の別れ愛着の道に引かるゝいぢらしさ。見るに目もくれ心消え、母も老母も声を上げ、

「わっ」

とばかりに取り乱せば、さすが勇気の光秀も、親の慈悲心、子故の闇、輪廻の絆に締め付けられ、堪えかねてはらはらはら、雨か涙の汐境、浪立ち騒ぐ如くなり。

またも聞こゆる人馬の物音、矢叫びの声かまびすく、手に取る如く聞こゆれば、光秀聞くより突っ立ち上がり、

「あの物音は敵か味方か、勝利如何に」

と庭先の、拗ね木の松が枝踏みしめ踏みしめよぢ登り、眼下の村手をきっと見下し、

「和田の岬の弓手より、おひおひ続く数多の兵船。間近く立ったる魚鱗の備へ、千成瓢の馬印は、疑ひもなき真柴久吉。風を喰らってこの家を逃げ延び、手勢引き具し光秀を、討っ取る術と覚えたり」

と云ふより早くひらりと飛び下り、「草履掴みの猿面冠者（かじゃ）、イデ一ひしぎ」

と身繕ひ、勢い込んで駈け出だせば、

「ヤアヤア武智光秀暫く待て。真柴筑前守久吉、対面せん」

と呼ばはって、三衣（さんえ）に替はる陣羽織、小手脛当も優美の骨柄、悠然として立ち出づれば、光秀見るより仰天し、駈け戻ってはったと睨み、

「ヤア珍しゝ真柴久吉。武智十兵衛光秀が、この世の引導渡してくれん。観念せよ」

と詰め寄る光秀。

「ホヽせいたりな光秀。ともに天を戴かぬ亡君の弔ひ戦。今この所で討ち取っては、義あって勇を失ふ道理。諸国の武士に久吉が軍功を知らさんため、時日を移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべし。ガ、如何に如何に」

「ムウ、さすがの久吉、よく云ったり。我も惟任将軍と、勅許を受けし身の本懐。ひとまず都に立ち帰り、京洛中の者どもへ、地子を許すも母への追善。互ひの運は天王山、洞ヶ峠に陣所を構へ、たゞ一戦にかけ崩さん。首を洗って観念せよ」

「ホウホウホウホウ、何さ何さハヽヽ。たとへ項羽が勇あるとも、我また孫呉が秘術を振るひ、千変万化に駈け悩まし、勝鬨あぐるは瞬くうち」

と久吉が、詞は揺るがぬ大磐石。たちまち巡り小栗栖の土に哀れを残すとは、知らず知られぬ敵味方。睨み別るゝ二人の勇者。二世を固めの別れの涙、かゝれとてしも烏羽玉の、その黒髪をあへなくも、切り払ふたる尼ヶ崎。菩提の種と夕顔の、軒にきらめく千成瓢箪。駒の嘶き迎ひの軍卒。見渡す沖は中国より、おひおひ入り来る数万の兵船。威風凛々凛然たる、真柴が武名仮名書きに、写す絵本の太功記と、末の世までも残しける。